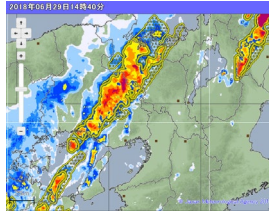


近年の猛烈な台風から防災を考える!

近頃、雨の降り方や風の吹き方が大きく変化しています。2019年大阪を襲った台風では、トラックが横転するような猛烈な風を映像で目の当たりにして思えることは「**私たちが経験してきた災害の経験値が当てにならない**」ことが多々発生し始めたといえます。

「**雨が降って、川が洪水になり、まちが浸水する**」という昔話のような話の流れから「**雨は降っていない、しかし急に川の水位が上がり、と思ったらまちが浸水した**」と、人の経験値での判断が災害発生までに間に合わないという状態を引き起こしています。

大きな範囲で雨が降り、それにより水が川に集まり洪水となるのではなく、一点集中の「**線状降水帯**」などにより、局地的豪雨が川の流域全体に被害を及ぼす『**異常災害の発生**』となっています。



簡単にいえば「**雨は降っていない。にもかかわらず洪水。えっ、なんで?**」となっているのです。

いわば、河川の流域全体で降った雨や上流域の川の水位などを全部読み解いて、それがいずれ中流域、下流域にどういった災害をもたらすのかを日常的に読み解かなければいけない高度な技術や幅広い知識を要することになってきているのです。ところが日本の防災というものは、「**市町村単位**」でやるというのが基本で、広く見積もっても「**県**」の単位になっています。

中流域や下流域にある**市町村の防災担当者**は、遙か彼方の上流域の雨や上流に流れ込む小さな河川の氾濫も、常に情報を収集しなければならないといった専門知識もさることながら、市町村の情報連携を常に行うという『**広域連携**』『**流域連携**』が必要であり、更には河川や降雨を読み解く専門知識を有した**担当者が**、広域情報を日常的に入手し、まちの防災に活かし、市民への防災情報の発信が重要になってきたのです。

さて、難しい話をしましたが『**本当にこんな連携が日常的に可能なのでしょうか?**』

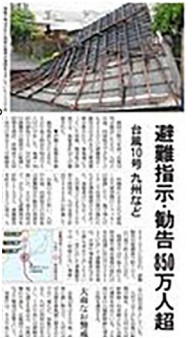
防災行政に力を入れることができる体力を有する市町村もあれば、そうではない市町村もあります。広域・流域の中で**一箇所でも欠ければ**、情報の遅延が起こり、中流域や下流域で災害が発生してしまうのです。

前回も申し上げましたが、『**災害過保護**』の時代は終わったのです。行政も頑張ってはいますが、今までの防災行政の限界値を、遙かに超えた災害が繰り返し襲ってくる中で、我々市民も「**自分で判断する**」そういったことが必要であり「**災害過保護からの脱却**」が

重要となっています。

行政から、避難情報や避難指示・勧告が発信されます。『避難情報が出た。避難しよう!』となっても「**どこに避難するのか決めてますか?**」。

今回の台風10号では、『**850万人超に避難指示・勧告**』。常識的に考えて850万人の移動なんて、何日かかり、どこへ避難すれば良いのでしょうか?「**本当に避難の受け入れ先があると信じているのですか?**」。信じているあなた!「**市内全域避難指示**」なら隣の町へ逃げる?でも隣町も「**市内全域避難指示**」。ならばどうするのですか?こんな訳の判らぬことが、近年の災害では多発しているのが現実です。



報道されていましたが、台風が来そうなときには「**自費でホテルに宿泊する**」ということも自主避難のひとつで良き案だとは思いますが、全員がそのように受け入れられる宿泊施設の許容量はありません。でも『**自分で考えて行動すること**』が重要なことなのです。これも「**自助**」のひとつなのですが、一般市民全員が自分ひとりで考え行動できるわけではありません。体力的にも費用的にも無理な方も沢山いらっしゃいますし、受け入れる宿泊施設側の人達はどうなるのだ!と言った意見もあります。「**じゃあ、どうすれば良いのだ!**」ということになります。正直なところ『**答えはありません!**』。非常にいい加減な言い方ですが、ひとそれぞれ普段の生活文化や暮らし方が判らなければ、他人がとやかくは言えないのです。限りなく答えに近いものを導き出せるのは「**あなた自身しかありません**」。備えを多くするのに越したことはありません。でも残念ながら『**きりが無い**』のが災害への備え。なぜなら!災害の**大きさにはきりが無い**のです。じゃあ、どこまでやるのか?それが**防災**なのです。

相手は「**自然**」。計り知れない力を有した自然なのです。我々はその自然の恩恵を受けて生きています。ならば「**自然と上手に付き合う**」これが大切です。

「**答えのないことが防災**」されど「**答えを探し続けることが本当の防災**」です。「**答えのない答え**」を、加古川グリーンシティ防災会と一緒に考えていきましょう。考え続けることで、不意の災害対応が可能になります。そして、忘れてはならない言葉「**楽しく防災をやろう!**」が必須アイテムです。

もしも、答えを導き出すヒントがあるならば「**自分の情報は、日頃から信頼できる人に伝えること**」。それが防災の答えへの近道なのです。